

演題「松寿院 種子島の女殿様」～ たおやかに、美しく ～

種子島に松寿院という女の殿様がいました。島民のために三十三年善政を行い慕われていました。土木事業が大好きな女性です。

松寿院は、寛政九年(1797)薩摩の鶴丸城の大奥で生まれました。父は、薩摩藩主二十六代島津斎宣(しまづなりのぶ)。於隣(おちか)と名付けられました。生まれる前から姫なら種子島家二十二代久照の嫡子鶴袈裟に輿入れすることが決まっていた。

於隣が嫁ぐ種子島家は、平清盛を祖とします。南海の十二島を領土としていました。種子島は、海の十字路です。明、ルソン、琉球との貿易。

紀州、堺、京都との交流。1543年、ポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲伝来がありました。江戸時代、種子島家は、薩摩藩に組み込まれましたが種子島の領主として治めていました。種子島にも赤尾木城がありますが、鶴丸城の近くに種子島屋敷を設け領土と行き来していました。



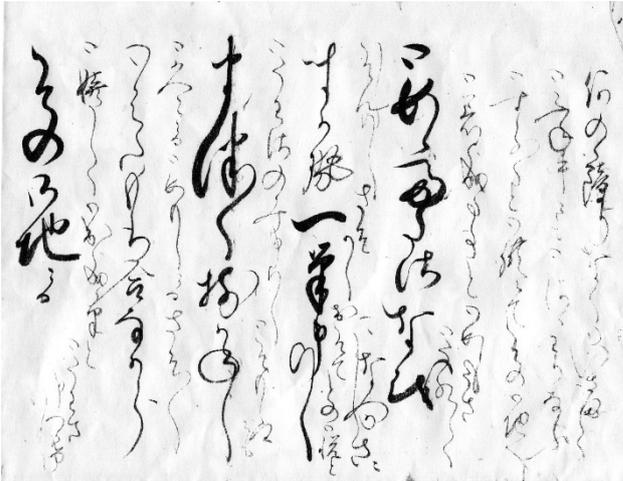
松寿院の肖像画 種子島 熊野神社蔵

於隣の里方島津家は、源頼朝を祖とします。薩摩藩の藩主として七十五万石の大名です。於隣は、生後三ヶ月で、種子島家に輿入れしました。養育係に上妻婦恵を当てます。婦恵は、この時四十八歳。学問好きで儒学四書五経を治め、和歌をよく詠み、芸事にも堪能でした。婦恵は、学問、人としてのありよう、種子島人の素晴らしさ、種子島の美しい自然、島主夫人としての心得を教えました。於隣の成長するころは、種子島は、飢饉、干ばつ、台風に度々見舞われ島民の暮らしは、逼迫します。於隣は、島主が苦勞して種子島を治め、島民を救済していく姿を見て育ちました。

もう一つ於隣の間人形成で大事なことは、島津家の父斎宣公の薫陶です。斎宣公は『鶴亀問答』の中で「君主の役目は、軽々しく思っではいけない。君主の第一にすべきことは、身を惜しんで領民の幸せを念頭に置くべきである」と。

於隣が十五歳の時、種子島鶴袈裟・後改め久道十九歳と正式に婚礼が執り行われました。

結婚を機に婦恵は種子島に戻ります。於隣が婦恵に宛てた手紙が残っています。「御そもじさまがいらっしやらないので **ただ 御そもじ様がお懐かしく毎日毎夜皆うちそろって御そもじさまの御うわさを申し続けおなつかしく存じます。……**」御そもじさまとは、丁寧に「あなた様、あなたさま」ということでしょうか。小さい時から育ててくれた婦恵が恋しい！恋しい！と言っているのです。当時身分制度の厳しい時代です。婦恵は、家臣です。しかし松寿院は、どのような立場の人にも感謝と尊敬の心で接しました。この手紙の「御そもじさま」という言葉がそれを象徴しています。



於隣から婦恵への手紙 種子島総合開発センター（鉄砲館）蔵

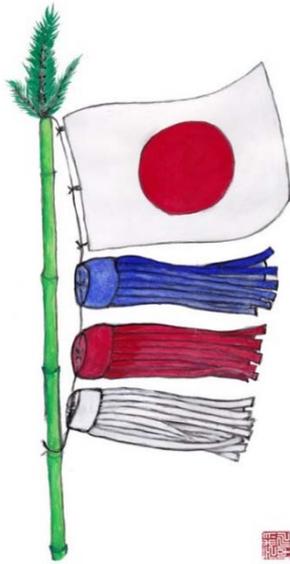
さて於隣は十八歳から二十四歳までの六年間に女子二人、男子二人を生みます。かわいい盛りに四人ともなくします。その慟哭は深いものでした。悲しみを癒すかのように夫の久道と母清孝院は、於隣を連れて種子島に帰ります。久道は、家督を継ぎ若い島主となり於隣は島主夫人です。於隣は、この時妊娠八ヶ月です。当時の種子島までの船旅は、早くて二日、長ければ十日もかかります。妊娠8ヶ月の夫人が船旅をするのは、無謀なことです。於隣は、

種子島人のやさしさ、海の風、穏やかな空気のみるみる元気になります。一家は島の巡視に出かけます。於隣は、臨月間近の大きなおなかを抱えて120キロもの長い道のりを籠でゆられます。道中何事もなく城に帰り女の子久美を生みます。島主一家が領土で三年間過ごすのは、珍しいことです。それには訳がありました。島津普之進(かねのしん・後島津久光)が種子島の婿あるいは、養子になっていました。鶴丸城で育っていました。種子島の家臣たちは、猛反対です。「島津家は、源氏。種子島家は、平家。相容れない。辞退すべし」と。島津家では、種子島家の反対もあり養子を取りやめ九歳の久光を島津家に取り戻します。種子島は一見穏やかですが独立と平家の誇りを持ち続けています。

文政十二年(1829)於隣三十三歳。最愛の夫島主久道が亡くなりました。同日於隣は、髻(もとどり)を切り「松寿院」となります。悲しんでいる暇はありません。種子島家には跡取りがないのです。跡取りがない領土は取り潰しです。松寿院と家臣は、たびたび会議をします。しかし結論が出ません。松寿院は、「わたくしが種子島を治めます。」と決心し島津家に申し出ました。「松寿院から名跡として自ら島政見る旨申し出があった。それを許可し、これ以後、お子様(島津家の公子)がいる節には相続されるようになるであろう」という返書がきました。

さあ！ここからが松寿院の女殿様の出発です。表の政治と奥向きを取り締まる日々です。外国船が来ます。その取締り、本藩への連絡。不祥事が起きたときの始末。罪を犯した者は、寺入りです。磔、打ち首もありません。松寿院の経済運営で大事な功績は、砂糖の税の軽減です。松寿院は、藩に文書を出します。これが認められ直接大阪に砂糖を売ることができました。洪水、蝗の害、大風の災害もあります。松寿院は、たびたび文書で「島民の救済を図るため決まった租税を減らし、山の租税を免じます」と触れを出します。久道の死後、種子島家の祭主がいませんでした。これを藩に申し出たときの藩の返書「我が国の朝廷にも女帝がいた。これを見ても松寿院殿が祭主でもよい」と。

日本の国旗「日の丸」は、種子島の船幡(ふなじるし)でした。天保六年(1835)父島津斎宣が磯山で狩りをしました。斎宣は、松寿院に海上から狩りを見るようにいいます。松寿院の乗った船は、種子



種子島家の船幡



島家の船幡日の丸下青・赤・白の吹き流しを立て、明け方 磯山の沖にするすと進みます。「日の丸」をご覧になって斎宣公から使いが来ました。「種子島家の船幡は、日の丸である。故に新しくこれを作り、日の丸は代々島津家の船幡とする」島津斉彬もこの狩りに参加し、日の丸を見ていました。島津家の船印になった日の丸は、薩摩藩初の洋式軍艦「昇平丸」に掲げられました。その後斉彬公は、幕府に日の丸を日本の旗とすることを提案しました。幕府は、日の丸を日本の船幡にし、後に日本の国旗になったのです。松寿院と種子島びとは、船幡日の丸がなくなったのは、無念としか言いようがありません。当時の家老知覧行寛に命じてその日のことを詳細に種子島家譜に書きとどめるよう命じました。その思いは、現代にも続き、種子島人の中でくすぶり続けています。ところが一ヶ月ほど前女性史研究家の柴桂子先生がNHKカルチャーラジオ歴史再発見の放送で「種子島松寿院～種子島領主としての政治」と題してお話くださいました。柴先生は、「日の丸」は、種子島家の船幡であり、後国旗になったとも言われている。とはっきりおっしゃってくださいました。松寿院と種子島人が無念に思った「わたくしたちの日の丸」を全国の人に知っていただき、経過はともかくとして国旗になり日の丸がたなびいている、「あれは、わたくしたちの旗！」と見上げるときがやってきました。柴先生に感謝です。

松寿院四十四歳の時、やっとな種子島家の跡取りが決まりました。斎宣公の十二男・松寿院の弟島津報七郎(後の種子島家二十四代種子島久珍(ひさみつ))です。江戸薩摩藩白金屋敷(現八芳園)で育ちました。報七郎二十一歳の若殿です。松寿院は、隠居ができると思うのですが、江戸育ち薩摩のこと種子島のことよくわからない久珍を補佐しなければなりません。もちろん久珍も達書を書きませんが松寿院の達書は、見事なものです。

「精進して不都合がないように。風俗を乱すことがないよう。身分に応じて無益な出費をせず質素を心得。農業を油断なくするように」と書かれてあります。久珍の奥方探しにも松寿院は、熱心です。島津一門家加治木島津家の信子の評判を聞き加治木邸に自ら出かけます。十五歳の信子は、久珍夫人になりました。孫も生まれ松寿院は、おば様様の穏やかな眼差しで孫と遊ぶ姿が見られます。

ところが薩摩でまた大事件が起こりました。「嘉永朋党事件」俗にいう「お遊羅騒動」です。斉彬公がなかなか藩主になれず、そのうえ幼い子供が次々に亡くなります。それは島津斎興の側室であり、島津久光の生母であるお遊羅の呪いであると噂が立ちました。藩を二分する騒動が起きました。切腹や遠島など処分されたもの五十四名にも上りました。松寿院は、お遊羅とも親しくしています。一時は斉彬公から疑いをかけられ、身内の騒動に心を痛める日々でした。松寿院の誠実さと人徳により斉彬公の疑いも晴れます。騒動がおさまリ、斉彬公が家督を継ぎました。

嘉永四年(1851)鶴丸城で「斉彬公ご家督御内証祝」が華々しく執り行われました。松寿院と島津ご一門家、種子島家一族も招かれました。松寿院は、島津御一門家ご夫妻より先にご案内があります。どの殿様よりもしずしずと前を歩く松寿院の姿がみられます。この時御能も催され鶴丸城は、喜びに満たされました。薩摩藩の「嘉永六年 表方御右筆日記」でも藩主家以外では松寿院が筆頭です。嘉永六年の記録では、今和泉島津家の於一(おいち、後の天璋院篤姫)が斉彬の養女になり鶴丸城に入ります。松寿院は、たびたび篤姫に会い伯母として、また島津家の長老として篤姫への助言をしました。ちなみに斉彬は、松寿院の甥、篤姫は姪になります。

島主久珍(ひさみつ)は、初めて種子島に赴きこれからという時三十三歳の若さで赤尾木城で亡くなりました。亡くなった七日後男子が生まれます。二十五代種子島久尚(ひさたか)、最後の領主です。わたくしの曾祖父にあたります。松寿院は、雄々しくも「これからは、わたくしが種子島を守る。島人を幸せにする」と決心します。

久尚が生後三ヶ月になるのを待って一家で種子島に帰ります。松寿院五十七歳の新たな出発です。これからの松寿院の働きは、目を見張るものがあります。すぐ島内の巡視に出かけます。巡視は、生涯十七回にも及びました。現場に赴き、島びとと語り、今何が困っているか、それを解決するにはどのような政策が必要であるかを現場で見極めます。南種子の大浦川の畔に佇み、潮入り田で米が採れないことが分かりました。大浦川の川幅を広げ、まっすぐにする**川直しの工事**に取り掛かります。

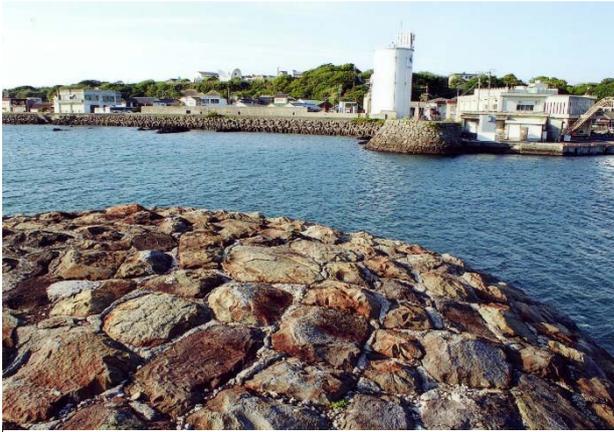
総監督は、高奉行西村蔵多。工事期間 安政4年(1857)1月～10月
新川の長さ200メートル、幅10メートル。働いた人 延べ 16,485人
経費 265両(松寿院のお手元金)

寒い時期から暑い夏にかけ工事は、続きました。松寿院は、祈ります。河の流れを変え、自然に鍬を入れます。川に祈り、水に祈り、工事をする島人の安全を祈りました。鍬で土を掘りモッコで運び土手を築きます。この土手を「安政土手」新しい川を「安政川」といいます。十二月五日、松寿院は、工事に携わった島人に深く感謝して砂糖一桶、焼酎四〇〇杯を平山村の人々に与えました。



大浦川 川直し 南種子町

当時種子島だけでは塩が足りませんでした。松寿院は、それを憂い**塩田作り**にとりかかります。大浦川の荒れ地に、安政四年(1859)六月に取り掛かり文久元年(1861)十二月完成。これまでの網代炊きの製法よりはるかに生産の上がる防州伝で年に千石も塩ができ自給は勿論屋久島にも売ることができました。費用は、松寿院の手持ち金です。



波止 西之表港

もっとも大がかりな土木工事は、港の波止の修築増築です。明治維新直前の日本には、外国船がしばしば現れます。松寿院は、早くから港の工事を思い続けていました。薩摩藩に援助を頼み、結果藩から1200両の援助を受けることになり、それでも大幅に足りません。松寿院のお手元金から出しました。万延元年(1860)から工事を初め途中休止の時期もありますが文久二年(1862)に完成しました。石を運ぶのに島内の船総動員

延べ7200隻。島民総出延べ23,131人。工事費用千二百両以上。波止の名は、沖の雁木、築島(ちきじま)といい今でも美しい姿を残しています。近畿大学の胡桃沢教授が『民俗文化』の中で「種子島に残された波止は、当時の最新技術を駆使して築かれた存在なのである」と書いています。この工事期間中も松寿院は石を取る山、川、神社、仏閣に工事の安全を祈ったのは勿論のことです。松寿院は、これらの工事が完成したのは、優秀な家臣のおかげ、よく働いてくれた島人のおかげと感謝しています。波止の工事に携わったのは、家老前田宗誠、物奉行西村蔵多ら多数でした。

大きな土木事業をしながら松寿院は、女性ならではの細やかな政治をします。その事柄と松寿院らしいエピソードをお話しましょう。

松寿院は、非業の死を遂げた者の供養塔を立てます。都城で戦国時代末期「庄内の乱」がありました。肉親同士が壮烈な戦いをしました。その折種子島から二百人ほどが出て都城山田で悲惨な戦死を遂げました。松寿院は、自ら都城に出かけ戦死した家臣の名前を刻み追遠塔を立てました。室町時代非業の死を遂げた三郎に「隆福権現」と追号して供養塔を立て、同じく非業の死を遂げた又太郎に「宝光権現」と追号しました。松寿院が尊敬してやまない十九代種子島久基(ひさもと)を祭神とした神社を建てました。久基の号をとって「栖林神社」とし今でも慕われています。また種子島家のお坊墓地、お拝塔墓地の整備をしています。



庄内 追遠塔

島民のために薬園も作ります。当時コレラがはやっていました。

「キナエン入フラスコー一個」を島民に与えました。これに添えた文書が残っています。「これは、先ごろより流行している病によく効く妙薬の由、係りの者へ渡してください。何時でも薬が必要であれば申し出るように。夜中でも希望があれば与えるように。この薬は、今のところ量が少ないのでフラスコー一個分だけであるが、もっと必要になるであろう。もし種子島の医師に持ち合わせがあれば田舎の方

へ回してください。代金は、取らないように。くわしくは、羽生半左衛門より説明するよう申し付けてあります。未(安政六年)十一月十六日」

種子島は、伝統的に学問の盛んなところですが、松寿院は、学校を建て、紙や筆を与え学問を奨励しています。『大日本史百巻』を学校に贈りました。

流人の受け入れもたびたびあります。天保十二年公儀の流人安次郎と亀次郎が許され江戸に帰ることになりました。ところが二人は、「島の人たちは、とても親切にしてくれました。江戸に帰りたくないのです。このまま島におらせてください」といいます。松寿院は、「ほほほ、それはいいことですね。家を作ってあげなさい」ということで二人は、島で楽しく暮らしました。

松寿院は、砂糖二十万斤の増産を藩に願い出ました。島民は、松寿院様の砂糖増産のことで知り生産に励みました。島間浦の甚五郎が大阪にいったときのことです。浪速の町を歩いているとある店の「石車」が目につきました。甚五郎は「お！これは砂糖づくりに役立つかもしれん。うまくいけば砂糖をたくさんつくれるかもしれん。松寿院様がお喜びになるかもしれん」と堺の港に石車を運び船に乗せ種子島に持ち帰りました。松寿院が甚五郎の真心を喜んだのは勿論です。住吉山、納官山の木材五十本の伐採を許し褒美としました。

松寿院は、褒美に自分の持ち物、珍しいものを家臣に与えます。羽織、海苔、狛犬、花瓶。今でもその家の子孫は、松寿院様からの賜り物として大切にしています。

安政六年(1869)アメリカの測量船が種子島にきました。その船に淡路の政吉が乗っていました。政吉は、みかん船に乗り嵐に遭いアメリカに漂着しました。アメリカ人と種子島の役人の適切な通訳をしています。種子島人は、乗組員をもてなし、お礼に「六眼鏡」をもらいました。早速松寿院は、種子島で作らせます。後島津久光公が江戸に向かう時持っていくため松寿院に六眼鏡五十ちょうを要請しています。政吉は、無事淡路、徳島に帰ることができました。

政吉を研究していらっしゃる徳島市の木嶋隆夫さんがいらっしゃいます。昨年政吉さんのご子孫に176年ぶりにお会いすることができました。

文久元年(1861)九月松寿院は、内意書をかきます。公的文書ですので漢文です。

十月十三日種子島赤尾木城の大広間で用人が家臣たちに読み聞かせました。

この内意書で、松寿院のすべてがわかります。松寿院の言葉として、最後に読ませていただきます。

「女だてらに事新しく出過ぎたことと思いますが、私は、幼少の頃よりこちらに参りまして、ご両親様に可愛がられて育てられました。その御恩は、筆紙に尽くしがたいものでございます。種子島家のご家法などあらましのことはご存知のことと思いますが、この度私が考えていることを文書にして三役以下それぞれの役目のかたがた、下々のものまで申しておきます。物奉行の第一の心得として、物品の出入りは、きちんとしておろそかにしてはいけません。用人の心得は、賞罰等しっかりと見聞き怠らないのは勿論のこと。若い者には、文武に励み、礼儀正しくするよう教え諭すこと。それぞれの役所・高

奉行は、専ら農業奨励の役をひき受け、年々の収納が入るよう奨励することがかんですよ。それぞ
れの勤めの場に怠ることなく、正しい道を守るように。先祖代々厳重なご家法があります。今になって
それがみだれては、これまであなた方がそれぞれの役所で真面目につとめたことも詮無いことになり
ます。そうなりますとわたくしも気の毒に思うほかありません。

そのようなわけで、前述のとおり、ずっとご恩を受けて来た私ですから、何かこれから先、お家の為にな
ることを残しておきたく、財政が不如意なので、平山村の川直しをして、そこに塩田を作りました。
その上不容易ながら、御上(島津本宗家)に、御下金等を願い出ました。地方検者野元三之助殿を
頼みにして、石工や人夫多数頼み、前ヶ浜波止を築く工事を計画いたしました。只もう三之助殿を
はじめとする役々の方々のお骨折りで、思ったとおりに完成いたしました。このところ、ほっとしてい
るのは、このことです。何も自分の勲功(てがら)を申し立てているわけではありません。今まで永年い
ただいた厚いご恩に報いるほんの一端になればと思うだけです。これから長く後世に伝えてゆくことにな
れば誠にありがたいことです。尤も、砂糖、生蠟やその他の産物もよろしいとのこと、しあわせの至
りです。是また係りの役々は、油断なく、三役ならびに、諸役々方精励勤務し、末々のものまで競っ
て島政の奉仕につとめ、上下円満に、静謐が肝要です。わたくしの気持ちが正しくつたえられて、少
しの間違いもなく、申し述べたいと思いますが、女のことゆえ思うばかりで文の前後の書き様もわかり
かねます。何卒よろしくお汲みとりくださいまして、よしなに取り計らってくれるようたのみます。」

松寿院 役人中江
文久元年 九月

是より四年後の慶応元年(1865年)種子島の浜邸です。松寿院は、いよいよ最期の時を
迎えます。3 役と家族が並ぶ中最後の力を振り絞って次のように言い残しました。

「わたくしは、長らく病に伏して、皆々に看護のご苦
勞をかけてまいりました。この時を迎えるのも天命
です。わたくしは、何も恨むことはないし、思い残す
こともありません。ただ久尚殿と宝慈院のこれから
先をこの目で見られないのがかなしいです。今後
此の2人を助けて、上には忠を、下には仁をもつて
のぞみ、しっかりと島政を行うように、私は、長く地
下で瞑るでしょう。

皆々 今の言葉を記録に残すようねがいます」



松寿院の墓 西之表市 種子島家お拝塔墓地

慶応元年(1865)8月20日 松寿院君 卒す。69歳。

【主な登場人物】

於隣(おちか)・松寿院	薩摩藩二十六代藩主島津斎宣の二女。 種子島家二十三代種子島久道正室。久道死後種子島の女殿様になる。
種子島久照	種子島家二十二代。久道の父。於隣の義父
お範(おのり)・清孝院	久道の母。於隣の義母。
島津斎宣(なりのぶ)	薩摩藩二十六代藩主。松寿院の実父。
上妻婦恵	種子島の人、於隣の養育係り
普之進	薩摩藩二十七代藩主島津斎興の五男。後島津久光。 島津宗本家二十九代島津忠義実父。実母遊羅。 種子島家に三歳から九歳まで養子・入婿。
報七郎	薩摩藩主二十六代島津斎宣十二男。松寿院の弟。 後種子島家を継ぎ種子島久珍(ひさみつ)
島津斉彬	薩摩藩主二十五代。幕末の名君。松寿院の甥。
天璋院篤姫	松寿院の姪。徳川十三代将軍 徳川家定御台所
知覧行寛	種子島家名家老

- 一、登場人物の年齢は、数え年を使用しています。
- 一、『種子島家譜』等からの引用は、現代語訳してあります。
- 一、月日は、旧暦を用いています。

【主な参考資料】

- 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺』鹿児島県 家わけ四・八・九 「種子島家譜」
- 『種子島家譜』1巻～6巻 鮫島宗美訳・箸 ぶどうの木出版
- 『松寿院 種子島の女殿様』村川元子著 南方新社刊

平成二十八年十月三十一日(2016)
大阪日本ポルトガル協会講演 於ホテルニューオータニ大阪
松寿院研究家 村川 元子 (旧姓 種子島 元子)